

会長就任挨拶にかえて



一般社団法人ニューガラスフォーラム会長
旭硝子株式会社代表取締役社長

石村 和彦

Kazuhiko Ishimura

今筆者の手元に一冊の本があります。日刊工業新聞社が発行した「ニューガラスの世界」という本です。昭和60年12月に初版が発行されていますから、まさにニューガラスフォーラムが設立されたその年に刊行された書です。当時まだ馴染みが薄かったニューガラスという言葉を解説し、その具体的な内容がたくさん盛り込まれています。また、ニューガラスフォーラムの設立総会の模様も詳しく記載されており、貴重な記録となっています。今読み返すと、フォーラムの設立に情熱を傾けられた諸先輩の御苦勞が改めて偲ばれます。

あれから四半世紀以上の歳月が流れました。私たちの身の回りの社会とガラス製品はどのように変わったのでしょうか。光通信ファイバーに支えられたインターネット社会は、本書の期待通りに人々の暮らしを大きく変えたと言えるでしょう。液晶テレビの普及と基板ガラスの大型化は、当時の予想をはるかに上回るスピードで進展したと言えるかも知れません。

一方で当時はほとんど予想も出来なかった変化もたくさん起きています。数年前に登場したスマートフォンは瞬く間に市場に浸透して来ました。タブレットPCを膝に置いてネット情報にアクセスする姿もよく見かけるようになって来ました。ご存知のように、これらの機器の表面には化学強化が施されたカバーガラスが搭載されているのが一般的です。ガラスは透明で硬く、他の材料では得られない独特の質感が市場に受け入れられています。デジタルカメラによる映像は銀塩写真をすっかり置き換えました。寸法と特性が精密に制御されたマイクロレンズがこのカメラの技術を支えています。また、車社会に目を向けると、いよいよ100%電気で走る車が市場にお目見えしています。この窓ガラスには今までとは一味違った機能が求められるようになっていきます。このようにガラスは人々の暮らしに密着しながら、益々進化を続ける素材であることが実感されます。

さらに、ガラスの製造技術の進歩も目を見張るものがあります。上述の液晶テレビ用のガラス基板は年々大型化、薄型化して来ました。各社が技術開発に凌ぎを削ってきた結果と言えるでしょう。またニューガラスフォーラムが主導しているガラスの気中溶解技術も、シーメンス法の溶解窯以来のイノベーション技術として期待され、着実に技術開発が進展しています。

四半世紀のニューガラスフォーラムの歴史は、そのままガラス技術と産業の隆盛の歴史と言えます。ここまで支えてこられた多くの先人の努力をそのまま受け継ぎ、官・学と連携を取りながら、新しい技術で来るべき社会の要請に応じて行くことこそ、産業界に課せられた使命であると言えるでしょう。ニューガラスの益々の繁栄を祈ってやみません。